

近世中後期における朝幕藩関係の再構築 ——尾州茶屋家と尾張徳川家・尾張藩重臣との関係を中心に

松本 柊 日本史学分野・専門 博士前期課程2年

調査概要 本プロジェクトは、近世中後期の朝廷関連の儀礼における尾州茶屋家の動向を、特に尾張藩との関係性に着目して検討することで、朝廷を含みこんだ幕藩関係（朝幕藩関係）について、「呉服師・呉服所」という新たな視角から重層的に再構築することを目指すものである（以下、本稿では呉服師は將軍（幕府）の、呉服所は大名（藩）の御用呉服商とそれぞれ定義する）。筆者は、江戸時代を通じて將軍家・尾張藩主家の呉服御用を担った御用達町人で、江戸・名古屋・京都を拠点に活動した尾州茶屋家を研究対象とし、同家の職務実態や、幕藩権力における位置づけについて研究を進めている。これまで筆者は、安永年間（1772-81）の尾州茶屋家が、尾張藩と幕府、諸藩とを繋ぐ「内証（非公式）交渉」ルートの1つとして機能したことを、具体的事例を通して明らかにした。ただし、この成果は尾州茶屋家当主の日記にのみ依拠したという史料の制約があり、同家の複層的な性質について十分に検討できたとは言えない。この点に留意し、今回の調査では尾州茶屋家の史料に加え、尾張藩重臣家の史料収集・分析に力点を置いた。

調査成果 まず、京都において尾州茶屋家が、尾張藩「呉服所」としての役割を果たしていたことを指摘したい。近年の研究で、呉服所が本来の職務である物品調達以外にも様々な職掌を担い、大名の京都での交際儀礼にとって不可欠な存在であったことが明らかにされている。尾州茶屋家も尾張藩呉服所として、諸藩の呉服所と類似した職掌・役割を担っていたことは、先行研究や関連史料からも推測される。

ただし、筆者が尾州茶屋家の特殊性として強調したいのは、尾張藩呉服所としての役割を果たしたのは、実際には同家の在京手代であった点である。このことは、延享2（1745）年版「京羽二重大全」で、在京手代である茶屋嘉右衛門が、当主と共に尾張藩呉服所として掲げられている点に示唆的である。嘉右衛門は、元文6（1741）年の尾州茶屋家側の史料では、尾張藩初代藩主・徳川義直の代から京都御用に従事していたとされる。また、江戸時代初期の尾州茶屋家の動向については不明瞭な部分が多いが、尾張藩側の史料によると、貞享4（1687）年に東山天皇即位を祝して幕府・諸藩から朝廷へ献上が行われた際、嘉右衛門は京都で献上品の調達や献上先への問合せに従事し、現地で尾張藩使者を補助する一方、当主は江戸で尾張藩主に近侍していた、とする。このことは、尾張藩御用に関する当主と手代の職掌が、遅くとも貞享年間には分化し、当主は藩主への近侍、在京手代は呉服所といったそれぞれ固有の役割を担っていたことを推測させる。

次に、19世紀前期の尾張藩から朝廷への献上儀礼を事例に、尾州茶屋家の職掌・役割について確認する。文政8（1825）年の女御入内の際、当主は経済的窮迫により幕藩御用を停止し、「引籠」の状態にあった。それにも関わらず、儀礼における尾張藩使者への随伴、献上先や幕府役人への問合・案内役といった、朝幕藩間を水面下で繋ぐ役割を担ったのは、貞享年間と同じく在京手代であった。当該時期の尾張藩側の史料には、嘉右衛門が尾張藩使者の儀礼上での失態を事前に防止する様子や、作法をめぐって公家家臣と応酬する様子が記される。また、嘉右衛門が経済的窮迫を理由に案内役の辞退を藩側に申し入れるも、藩が金銀・衣服を下賜することで随伴を実現させたことも分かる。このことは、尾張藩が嘉右衛門（在京手代）を、京都で使者に求められる礼儀・作法に知悉していた点において積極的に評価していたことを意味すると考えられる。

以上より、幕藩権力が尾州茶屋家の当主・手代に求めた役割が異なっていたことが認められる。手代の役割は、経済的窮迫の中で同家が幕末まで存続しえた理由を考察する上で、重要な視角であると言えるだろう。なお、本プロジェクトは新型コロナウイルスの影響で、当初の調査計画の大幅な縮小を余儀なくされた。手代の役割の具体的な検討や、他の呉服師・呉服所との相対的な比較も、尾州茶屋家を朝幕藩権力との関係で位置付ける上で必要であろう。尾州茶屋家の本業である呉服御用の分析も含め、今後の課題としたい。